筑前國續風土記　卷之二十八目錄

古城古戰場　五

早良郡　古城四所　古戰場三所

百道原　九州探題城址　鉢の窪
飯盛城　安樂平城址　曲淵古城
背振山

怡土郡　古城九所　古戰場三所

高祖古城　曾根原古戰場　怡土城
篠原古城　うなぎれが辻
小倉村古城是より以下公領　加布里村古城
寶珠岳古城　有田村古城　深江岳城
吉井岳古城以下唐津領　鹿家古戰場

志摩郡　古城八所　古戰場一所

鷺城址　臼杵氏端城　柑子嶽古城
加也山古城　姫島古城　土師村古戰場
馬場村古城　泊村古城　元岡村古壘

筑前國續風土記　卷之二十八

貝原篤信　選定
貝原好古　編錄
竹田定直　校正

古城古戰場　五

早良郡

○百道原

麁原(そはら)村の北に在。今は俗に紅葉原と云。後宇多院文永十一年、蒙古來りて日本を攻し時、異賊の兵と此地にて日本人防ぎ戰ひ、少貳豐前守景資、敵の大將を射殺せり。此事八幡愚童記並少貳系圖に見えたり。詳に本書紅葉松原の所に記せり。

○九州探題城址

浦山の巽に當りて、愛宕の社に近く、南の方に出たる山あり。其上に平地あり。此所則探題の城址なり。正保慶安の比までは、城の古瓦(かはら)多く殘れり。其瓦に法

華經の文字を燒付てありしかば、人悉く取て、今は其瓦なくなりぬ。伏見院永仁元年三月、鎌倉の執權北條貞時、初て北條兼時を筑紫に下して探題とし、九州二島の政事を司どらしめ、西國の藩鎮として、異賊襲來の防禦に備ふ。是五代の時、太宰帥の任に當れり。兼時此城に初て住せしより後、鎌倉北條家より相つゞきて、九州探題を下しけるが、其城地は此所なり。後醍醐帝の御時、北條高時より北條英時を探題としてこゝに下す。英時滅亡の事は、太平記及九州記に見えたれば、爰に記さず。英時が亡びし時の合戰に、うたれし士卒をこゝに埋しにや。又其後此處に軍ありて、戰死の人ありしにや。近き比まで、此山の麓の田の底より、時々骸骨を掘出せるよし、土民いへり。足利將軍の時、澁川氏、斯波氏などを探題として、此國に下されける。是は浦山の西なる山に住せりといふ。城址あり。其外、他所にも在城せしと云。

○鉢の窪

生の松原の西、油坂の東の下り口にくぼき所あり、是を鉢の窪と云。松原の内には非ず。是より油坂へ通る。此道古の海道なり。今は古道と云。一説に、松原の東の入口を鉢の窪と云。近比までは、此地を掘れば髑髏枯骨など出しと云。此邊は、原田と大友と度度戰ありし所なれば、其時討死せし者の骸骨なるべし。

○飯盛城

飯盛山の上に城址あり。太平記に、康安元年七月六日、征西將軍宮 新田一族二千餘騎、菊池肥後守武光三千餘騎博多に打て出ける。是を討んとて、大友少貳宗像等、都合二萬五千餘騎、一手に成て大手に向ふ。上松浦、下松浦の一黨三千餘騎は、此飯盛山に打上て、敵の後へぞ廻りける。菊池が家の子城越前守、千餘騎の勢にて、飯盛山に押寄せける。松浦黨元來大勢なり、城よければ、此敵に落さるべき樣はなかりける

を、城中に敵の内通の者多しと、越前守が謀にて告たりしを誠と心得て、御方に討るな、目をくばれと云程こそありけれ、我先にと落ける間、寄手勝に乘て追かけて是を討つ。敵ながら手痛からんと思ひつる松浦黨をば、城越前守が謀にて、輙くせめ落しぬ。菊池は宮の御勢と一に成て、明日香椎の陣へ押寄ければ、少貳大友敗北す。此城近代は、原田丁榮端城なりと云。城址に千貫矢倉などいふ址もあり。

○安樂平城址

重留村に屬せり。重留村より此城の麓まで十町許あり。大手口あり。本丸は高き山なり。廣さ一段許。二の丸は、西の方ひきゝ山に在り。又遙か西に出城あり本丸の乾に、寄手の陣所の跡あり、陣の尾と云。荒平の城址と東の山との間谷あり、大谷と云。其谷廣し。其下を城の原と云。谷頭は山ひきし。城山は其西に出て、別山のごとし。凡小笠木村より仙道に至るまで、其間の東西に長き山を、すべて荒平山と云、

茂山なり。北の方も、西畑より重留の上まで一里餘つゞきて、林木茂れり。小笠木、脇山、内野、東入部、重留、此五村、荒平山の下に在り。然共城址のある山は、右の荒平山に非ず。下はつゞきて、別の峰也。重留(とめ)村の境内なり。大友の旗下小田部民部大輔鎮通入道紹叱、天正廿二年に初て此城主となり、早良郡を切隨へたり。然るに天正七年の秋の頃、肥前國龍造寺山城守隆信は、筑後を討んとて、二萬人を引卒し發向せしかば、筑後國は事故なく服しける故、肥後に軍立せり。隆信が三男江上(がみ)下總守家種は留守たりしが、我も敵を討て手柄にせんとて、執行越前を士(さぶらひ)大將とし、神代(くましろ)對馬、同彈正、筑前住人原田彈正入道、曲淵河内等を相添、其勢都合五千餘人、早良郡背振山の麓に陣を取、所々放火し、小田部城下を燒拂ふ。小田部は城下を燒拂はれて、無念に思ひしか共、多勢に懸合せては叶ふまじ。城を堅く持たば、敵旅勢の長陣は難成かるべしと思ひ、かたく籠

城の覺悟也。執行は思慮ある者なれば、かくては更に詮もなし。小田部を押詰置ならば、民の妨にも成まじと思ひ、池田に脇山村の枝村也。向城を取りたりける時に、池田に大敎坊と云山伏あり。初は小田部に屬せしが、聊小田部に恨み事有て、肥前方に一番に馳加はる。越前云けるは、此所荒平よりは表門口なり。敵大手の口より、度々人數を指出すと聞ゆ。大敎坊は百人許の人數を持たれば、此所を預置、我は内野の山に陣取て在陣し、内野村に本城と云枝村あり。是執行氏が陣所なるべし。飯盛岳には原田に城をとらせて、人數を里に指下し置ならば、小田部が所領を押へ取て、兵糧づめにすべき事、案の内なりと云ひしかば、皆々此議に同じけり。さる程に小田部は堅く籠城したりしが、漸三とせに成にければ、城中兵糧盡て籠城も叶ひがたく、紹叱腹切て、城中の諸卒をたすくべしと思ひけるを那珂郡鷲が岳の大鶴宗雲是を聞、急ぎ立花の戸次道雪に使を立、小田部が難儀を告、人數加勢あるべしと乞け

り。道雪此由を聞、急ぎ加勢を參らすべしと返事ありければ、使の者聞て、宗雲申付候は、若御加勢下さるゝにおいては、今月十日の夜御人數を指出され、入部の社に伏置給ひ、執行が陣の間はそれより三町あるなれば、明日辰の刻に押寄給ふべし、と申ければ、道雪此由を聞、委細心得たり。家人十時某を士大將として、人數を指向べしと返答し、宗雲使を歸されければ、先荒平に行、此由かくと告たりしに、紹叱父子悅事限なし。紹叱に二人の子あり。嫡子を九郎と云、十九歳也。次男は源次郎と云、十一歳なりける。既に其日の暮方に成ければ、城には源次郎を殘し置、家中は老若共に殘らず引具し、忍びて城を出、山川を境にして明屋敷に籠り、明日を遲しと待居たり。明れば天正七年九月十一日の早天。いまだほの暗きに、敵の兵是を見て、籠城の輩が兵糧盡て亂妨に出ると呼はりければ、若士共是を聞、急ぎ走出るを、小田部方よりは兼てたくみし事なれば、一人

も殘らず隱れけり。然るに池田勢の中より云けるは、城中の者は糧盡て、押取せんと幾度も出れ共、軍する事更になし。されば執行の常にのたまふは、口々に陣取て、籠城の武士共をほし殺にすべきとの事なれば、とても死する命を合戰に出よかしと、聲々に喚たり。紹叱は此由を聞、忍て有とは云ながら、雜言するこそ口惜けれと云ければ、鐵砲持たる若者共二三人立出て、口のさがなき奴原を討て倒さんと打かくれば、あたりにありし三十人許の者共も、敵に頭を揚させず、一向に打かくる。大敎坊是を見て、長刀おつ取出ければ、時に有合者共續て間近く寄たりけり。小田部が兵此有樣を見て、大敎坊は小勢なり。間近く來るこそ幸なれ。我討取んとぞすゝみける。紹叱是を見て、時を定てする軍なれば、わざとひかへて是にあり。一人も出べからずと、かたく制しけれ共聞も入ず。足輕の者共を四方へ追散し、大敎坊に切てかゝる。大敎坊事ともせず、三十人許をひきゐ、

寄來る敵を待かけ、火花を散して戰へども、多勢に無勢叶はずして終に敗軍せり。小田部方には大敎坊兄弟、龜井新七・箱田彈正を討取て、殘る者共を東西に追散し、池田の城に取かけ、あたりを放火して攻たりける。紹叱は大敎坊の首を見て、かねてにくしと思ひしも、扨は本望を遂たりと斜ならず悅び、さらば首共、早く宗雲に見せんとて、鷲の岳へぞ送りける。宗雲より加勢の侍大將に、舍弟の宗逸を遣したりしが、只今の戰の次第を見て腹を立、小田部家中の者共は、分捕高名したりしに、宗雲加勢の者共が、首の一も取ざらる事、無念至極と思ふ也。池田の城のさゝへて有を、宗逸が手にかけて攻落すぞ、九郎も同心し給へと、手に手を取て引立れば、紹叱力及ばず同心し、脇山川を打渡りぬれ共、朝日はいまだ出もせず。されば共紹叱老武者の事にて、宵より今朝迄の戰に勞れぬれば、息をつがんとしばらく休らひ居ける所に、內野の山より執權越前是を見て、放火を揚

るは、大教坊を追詰て、此城にかゝると覺えたり。いざや大教坊を助んとて、内野の山より下りけるが、内野村と西村の境に馬立が原と云所有。此時執行馬立し所と云。若立花より加勢して、城に寄る事もやあらんと、神代(くましろ)を城番に殘し置、敵陣さして打て出、大勢にて小田部が勢を取卷、火出る程こそ戰ひけれ。小田部方は多くは老武者にて、殊に軍には仕つかれたり。多勢に無勢叶はずして、紹叱父子討死す。其士卒も大半爰にて討れける。たまたま遁れたる者をば其儘ゆるして、内野勢早く引取ける。内野村の内小熊と云所に、此時討死の士卒をうづめし首塚在。去程に、立花道雪加勢の人數六百人許、つばき瀬の川岸迄來りしが、小田部父子一門士卒、不殘執行に討れたる由云ければ、立花家臣十時是を聞、紹叱父子討死せし上は、合戰も無益也。内野の城を攻落すとも、人數二三百も討死せずば落城すべからず。小田部の爲にこそ遣されし加勢なれば、小田部討死したる上に、此小城(しろ)を攻落さんとて、多くの人數を殺す事は、兵亂半に道雪へ

の不忠也とて、靜に陣をぞ引たりける。執行は小田部を既に討取たり。城中の女童をば助くべしと、大手の口をあけ置けるが、道雪と宗雲より兵糧を籠ると聞て、さては殘らずほし殺にすべしとて、大手の口二町許に執行陣を取、やだけの山の頂上には原田草野在陣す。脇山口のこがら嶺には、小賀桂情入道在陣す。入部の口には神代固めたり。城下の男女網代の魚のごとくにて、行べき方もなく、兵糧も盡ぬれば、小田部氏が妻幷其子源次郎方より、使に女を指出し、詫言して城をぞあけ渡しける。小田部氏此城にある事、二十七年にして終に亡びぬ。（塔の原と云所の道ばたに、首塚とて大塚あり。荒平と肥前勢と戰ひし時、首をうづめし墓なりといふ。）

○曲淵古城

曲淵村の南にあり。元龜天正の頃、曲淵河内守氏助、其子信助在城せり。高祖の原田氏に屬す。城の上五畝許あり。麓に居宅の址有。中門、表門、大門の跡に石垣猶殘れり。宅の廻りの川端にも石垣有。此河

内守は石竈、曲淵、西村、金武四箇村、田村、矢郎丸、野芥、七隈、荒江、麁原、凡十一箇村を領せりと云。河内守後に浪人となり、長政君此國を領し給ひて後に死す。（一本云、右十一ヶ村の田畠高今は一萬千石餘あり。）

○背　振　山

南朝記に曰、南朝天授元年三月、探題今川了俊、大内茂弘、筑前世振山に陣す。菊池肥前守松浦黨以下攻之。今川方奥山、井伊、笠原等討死す。然共菊池松浦打負、陣を去。

怡土郡

○高祖古城

高祖山頂上に在。原田氏代々の居城なり。其舊址を見るに、本丸の址南に在。尤高し。上は平地也。東西三十間、南北十間、南の方に高四尺許の土手有て、東西に長し。其北に、本城と二の丸との間につゞきたる城址有。ひきくして長し。南北四十五間、東西六七間有　又其北に二の丸あり。右のひきゝ所より六

七間登る。上の廣さ、南北三十間許、東西二十五六間許有。上は平地なり。本丸二丸、今は矢篦竹多くしげれり。石垣の址有て、所々にから堀殘れり。誠に要害の地也。本丸の隍(ほり)の跡に、姪濱堀と云所あり。是原田氏重て此城を取立し時、姪濱の村人にほらせし所なりと云。本丸の南三四町に、鬼が城とて高き山有。本城よりはひきし。城の上に、谷間より登る道あり。其麓に、原田氏の常の居宅の跡有。高祖の社よりはるか上なる所なり。村民は御館と云。今は田となれり。其下に堀切あり。其南に上高祖とて、原田氏家臣共の居たりし宅地あり、廣し。今は竹林となれり。高祖村の前には、南北に長く隍をほり、取入の要害とせり。其隍今は田と成ぬ。大手の門の在し所を大門と云。今は大門村となりぬ。高祖村は山下にあり。高祖の社より猶下にありて漸下る。村中多は原田家侍の宅なりし故、今も民宅多して、各區別をなせり。廣宅甚多し。故に村中廣し。高祖社の鳥居有し筋に村の入口に、大鳥居

口とて、門のありし跡有。凡此城は、其分内廣からずといへ共、高山の上、嶮によりて築きし城なれば、要害堅固の地成しとかや。上の原の方よりも此城に上道有、けはしからず。又此城の北の麓、上の原青木村に、三重のから堀有。其構夥し。是此城の搦手の要害成べし。里民は安德天皇の皇居をこゝにたてんため、此堀をほりしといへど、さには有べからず。此城主原田氏の事は、今其家說に云傳ふる事、悉く信じ難しといへ共左に記す。原田氏は、唐土後漢の獻帝の遠孫なり。獻帝の建安廿四年、魏文帝に位をうばはれ、獻帝の四子共に諸侯に列す。中にも第一の王子昌武王は、文武の才有といへ共、魏帝即位の後、恢復の功成難く、南漢國の覇王となれり。其子顯章王より、十三世、阿多倍王の時、天下唐の代となれり。唐の太宗即位の後、貞觀年中南漢國の王位を辭し、日本國孝德天皇の御宇、大化年中十二月晦日、播磨國大藏谷と云所に着岸せらる。阿多倍王漢王の嫡孫なれ共、末代

に成て、我國を賴て歸化せられしかば、日本の貴客として難波の都にうつされ、大臣の位に任じ、高貴王と稱せらる。時に先朝皇極女帝、位をすべりてましくしかば、則高貴王に嫁しおはしまし、三王子を產給ふ。是等の說、妄誕信し難しといへ共、彼家傳に記せしまゝに爰に書付侍る。第一の王子拏直王是坂上の連祖、第二王子貴重王大藏朝臣の祖、第三王子基淳王內藏連祖也。白雉五年十月十日、孝德天皇崩御し給ひしかば、御姉皇極天皇重祚をふみ給ふ。後に齊明天皇と號す。第二王子貴重王、女帝の御愛子にて親王の宣旨を蒙り、阿多倍王に屬し來る。民俗(一本)陪臣皆中子に附與せられしかば、高貴王の本家は大藏姓に相傳せり。朱雀院天慶年中、藤原純友叛逆しければ、追討使として、小野好古朝臣を指下、其功なかりしかば、天慶三年五月三日に、高貴王より十二代の後胤大藏春實を對馬守に任じ、錦御旗軍配の蒲團扇を賜り、筑紫に指下し給ひ、天慶四年純友を打亡しかば、其軍功の賞によつて征夷將軍に任せられ、

筑前、豐前、肥前、壹岐、對馬を管領し、名を春種と改め、筑前御笠郡原田に居住す。故に原田の號あり。是則原田、秋月、波多江、江上、高橋、三原等の元祖也。春種の子泰種迄は猶原田に住せり。泰種の子種資が時、同國那珂郡岩門に館を築て、時々こゝに來り住せし故に、種資を岩門權頭と號す。種資が子を太宰大監種納と云。其子原田太郎太夫種成と云。後種衡とあらたむ。種成が子を原田權頭種雄と云。種雄が子を原田次郎太夫種直と云。此數代原田を本城として、折折岩門にも住り。故に種直を岩門の少卿種直と云。平家物語に、岩門の諸卿と書しはあやまりなるべし。少貳の異名は少卿なり。時に種直太宰少貳たり。種直は從五位に敍し、筑前守に任ず。小松内大臣重盛卿、其叔父家盛の女を養子にし、種直に嫁せしむ。故に平家に親みふかし。重盛の吹擧(すいきょ)にて太宰少貳に任せり。博多津異船の押へのため、又は太宰府にも程遠からねば、專岩門の館に居住し、本館の原田は旅館のごとく成行けり。治承四年六月、後白河法皇福原に押籠

られさせ給ひける時、警固として種直及種直が二男嘉摩兵衛重國、種直が弟美氣三郎敦種、家の子山崎平次重秋抔、隨兵三千餘騎にて參りける。（源平盛衰記第十六卷に、法皇を福原に三間なる板屋を作り云々、筑紫武士岩門の諸卿種直の子佐原大夫種益守護し奉りけるとあり。）其後安德天皇の供奉して、平家の一門都を出發せし時、種直は二千餘人を引率して乘輿を警固し、安德天皇を我岩門の館に入奉り、太宰府に參籠し給ひける所に、豐後國の住人緒方三郎惟義源氏に屬し、太宰府を攻んとするよし聞えければ、三位中將惟盛兄弟に、菊池次郎隆直以下の官軍を以て防がせられけれ共、多勢に敵し難くて、安德帝太宰府を落させ給ひ、箱崎を過、香椎潟、垂水（たるみ）山、鵜濱（うづら）など云所をこえて、山鹿の兵藤次秀遠を賴み、山鹿の城に入せおはします。種直は秀遠と不和なりしかば、山鹿の城に入て秀遠が下知につかん事、子孫に傳へて口惜かるべしとて、引返す。菊池次郎隆直は、宗盛の下知を受て、肥後國大津山の關（南の關と云ふ。）を緒方が塞しを切ひらき、安德帝を

肥後に入參らせんとて、道より引返しけるが、心替して源氏に屬す。臼杵、戸次、松浦黨は疾く平家を背き、源氏に降參してければ、平家は西國にも止り得ず、逆旅にうかれ漂ひける。それより四國に渡り、讃岐の屋島に内裏を作りおはします。種直も又參り、安德帝を守護し奉りける。安德帝筑前に御座ありし時、種直隆直が忠、群に超たりとて、勳功の賞行れて、原田次郎太夫は筑前守、菊池次郎は肥後守に補任せらる。誠に西國は平家の知行、殊更菊池原田が猛勢なるを賴み、落下らせ給ひしかども、九州の諸士多く源氏に心を通じければ、種直隆直も力及ばず。安德帝三種の神器を帶してわたらせ給へば、天照大神八幡大神も、定て守護せさせ給はんずるに、かく平家を背けるは、日頃の惡行超過して、人望に背きし故なるべし。原田一家の輩は始終平家に附隨ひ、忠功を勵しけれ共、平家亡び、源賴朝終に天下の權を執り給ひしかば、種直は鎌倉へ召下され、平山季重に預られ、

扇谷に押籠られて、十三年の春秋を過し、建久八年に赦免有て此國に下り、舊領の内に安堵せしかば、家の子郎從聞傳馳集るといへ共、前代の家臣にだにも及ざる程の有さまにて、暫し有ける處に、怡土郡の鎮主高祖大明神の社務上原兵庫とて、勢有る者ありしかば、緣を以てふかく賴入しに、かひ〳〵しく領掌して、種直が四男種成（後に早良四郎大夫種成と云。早良郡を領して重留村に住せり。）を婿（むこ）とし、力を副へければ、其勢（いきほひ）に乘じ、次第に近邊を押領して、武威國中に振へり。（以上原田記）此時高祖村の城をも再築きたりしとぞ聞えし。是より子孫連綿して斷絕せず、世々高祖の城に居住せり。弘安四年蒙古發り來りて、博多にて合戰有し時、種直八代の後裔原田五郎種之戰功の譽有て、鎌倉將軍惟康親王より、褒美の御敎書を給はりける。其後弘安、建武の世の亂には、武家方にて忠節を抽、軍功の賞に預り、又近邊を伐取、漸大家となれり。然れ共遠國にありし國士成し故、世にしらるゝ事なくして、太平記等

の記錄にもしるさず。此類諸國にも多し。原田孫次郎種遠、建武年中に雷山にて狩せし事を、公家雜訴決斷所より、筑前守護所に當て實否糺明の牒狀、雷山に今にあり。又曆應二年原田孫四郎種貞、博多津警固番を勤仕せしめ、其趣奉行所に言上の狀あり。それより漸武威もつよく成れり。將軍足利義敎、赤松滿祐入道性具が爲に弑せられ給ひける頃ほひより、將軍の威おとろへ、畠山、山名、細川等勅命をも恐れず。武命にも從はず、ほしいまゝに逆威をふるひ、兵亂やむ時なし。義政相續で征夷將軍に任ぜらるゝといへ共、猶更威望も輕く、細川勝元、山名持豐入道公方をないがしろにし、洛中にして七箇年合戰し、其餘黨諸國にあらそふ事年久し。此時天下大に亂れ一日片時もしづかならず。就中西國には、周防に大內あり。豐後に大友、薩摩に島津、鼎(かなへ)のごとくに峙て威を逞し、大は小を合せ、强は弱をのむ。其時より大內助多々良朝臣義弘、其子持世、政弘など代々九

州の探題を相續し、成敗を掌り、九州の諸侯彼が下知に從ずと云事なし。原田幷其一族秋月、波多江、江上、三原、高橋等皆大内家に屬し、應仁の大亂にも洛中にて戰功有。其後大内左京太夫義興、武家の管領職たりし時、永正年中、洛北船岡の合戰に、原田隱岐守興種、波多江中務少輔種廣、大軍を退け、細川政賢を討果し、足利義植征夷將軍に再任し給ふ事、兩人が武功によれりとて、御感狀を給り、所領を加へ給ふ。斯て年月を經る所に、義興の子從二位太宰大貳義隆、天文年中に、其家臣陶尾張守晴賢全姜入道と稱す。が爲に弑せらる。其後陶全姜は。毛利元就の爲に亡さる。是より先、興種が一男原田五郎に大内義隆一字を授け、隆種と號し、越前守に任ず。後に剃髮して劉雲軒了榮と號す。此人武勇の譽有て、威を近境に振へり。此先志摩郡も、中通りより奥の地士は、とく大友方なりければ、好士岳と云ふ城に、大友義鎮の一族臼杵新助鎮賡（つぐ）を居らしめて、志摩郡の旗頭とす。元岡、古

庄、由比、泊、小金丸など云郡士、彼が下知に從ふ。かゝりける處に、原田彈正少弼隱岐守興種、弘治改元の頃、羈旅の陣中に頓死す。家累分散に及ぶ。其時一男隆種、とかくして家を興す。其折しも大友宗麟が彼所帶を押領せんとするに依て、隆種恨を含で、毛利元就を賴み、大友に敵す。隆種は益〳〵武德有て、賞罰嚴重なれば、士卒思ひ付て家門繁昌し、其勢近國に振へり。永祿十一年七月、柑子岳の臼杵新助鎭賡、大友宗麟の下知によつて、原田了榮を亡さんと企て、同月十九日、奥志摩の士泊中務少輔源盛家、同又太郎統家、由比重留、六郎次郎、同大學助、元岡右衞門太夫、藤原鎭宗、馬場越後守、紀清貞、松隈將監、源正行以下を相語らひ、種々計謀をめぐらし、立花、高橋等に加勢を乞ひ、高祖の麓小金坂迄押寄たり。隆種是を聞、千人を二手に分、一手は上の原よりしのんでおろし、北濱を廻りて敵の後を切、一手は隆種逞兵を勝て、八百餘人、かさより落しかけ

て挾うちければ、臼杵忽敗北す。城の北の方には敵充滿たれば、三雲村の前を過、池田川原を下りに大崩して、柑子(かうじ)岳に引入ける。高祖方に討取首數二百三十三、池田下河原に懸雙べ、勝鬨を揚て高祖に打入る。此時志摩郡中通(なかとほ)り不殘原田が手に入、彼所の給人等家禮となる。新助は元龜二年豐後に歸り、柑子岳には臼杵進士兵衞と云者を遣し置ける。元龜三年正月廿八日、泊又太郎、馬場越後守案内者として、志摩郡中通りを打廻る由(よし)聞えしかば、追々馳合せ、池田下河原にて合戰を始む。志摩郡方敗北して進士兵衞討れにけり。此事志摩郡土師村古戰場の卷に詳なり。此時波多江丹後守武勇の働あり。此進士兵衞は志摩郡政所(まんどころ)職として、柑子岳に在城しけるが、驕て色に耽る故、郡士從者もうとみける。然るに私に軍を起し、丁榮を討んとする事度々也。元龜三年正月十六日に、今津の毘沙門に詣で歸りけるを、討んとしけれ共叶はず。今度又軍を發して原田を討んとせしが、却て彼がために討れけ

り。了榮が勢彌大になり。志摩郡を悉く伐取んとす。臼杵討れしかば、殘る士ども、緣を以てことゞく了榮に降參す。小金丸民部大輔も、大友方なりしかども屬して人質を出せり。是よりさきに、志摩郡中通りは既に了榮に從ひぬ。臼杵討れて後、了榮志摩郡四百町を領するのみならず、西は松浦、草野畑と爭ひ東は立花、筑紫、宗像と戰ひ、南は龍造寺隆信の領分にも働きけり。天正十年以後、原田了榮は怡土、志摩、早良を打從へ、漸く那珂郡も大半手に入、肥前の草野迄したがひしかば、其勢近國に振へり。了榮死して其孫信種相續す。其比京都には豐臣秀吉公諸國を打平げ、天正十五年の春、九州の敵を討んとて下向し給ふ。大友義統、立花、高橋、筑紫等は、秀吉公へ兼て使者を立て降參し、薩摩への先陣を勸む。秋月種眞、原田信種（信種實は草野中務大輔鎭永が男なり。原田親種死後に了榮是を養ひ、親種が子とす。又鎭永はもと了榮が三男なり。草野長門守永久養子して草野の家を繼しむ。信種も實は了榮が孫なり。元服の時龍造寺隆信一字を免して信種と號す。）は無二の薩摩方なりければ、豐前の小倉

に出向ひ、上方勢を押へんとて、先軍勢をうかゞひ見せんため、信種より波多江丹後守、笠大炊助與長を赤馬迄指遣す。兩人物馴たる者にて、秀吉公に敵對叶ふまじき事を悟て、宮部善祥坊、淺野彈正長政を以て信種降參の使のよし申上ければ、秀吉公悅び給ひて、兩使を御前に召れ、此間九州の軍の樣共尋問ひ給ひ、御腰物を賜りて、薩摩の先手に加るべしと仰付らる。兩人ゝ高祖に歸りて、信種に此由を申けれ共、信種あへて承引なく、猶秋月父子と云合せ、一向敵の色を立ける。かゝりし處に、秋月父子は秀吉公の武威を恐れて降參し、先陣に馳加はる。原田信種はかくともしらず、殊更田舍武士にて、此時分近郡の城持共と、千人二千人の戰を大軍と思へりゝか樣の節度々利を得たれば、己が武勇にほこり、上方勢は公家長袖のごとしと思ひ侮り、何程の事か有べき、一當あてて追散さんとのゝしりて、高祖の前なる大門河原にて勢揃をし、手を分て處々の要害をぞ固めける。長

垂山には富田大膳亮、上原新左衛門、大原佐渡守に人數五百人を指副て備置、油坂口には笠大炊助、中島治部左衛門、柴田伊賀守を頭として、五百餘人指遣す。日向嶺には鬼木又左衛門、泊丹後、萩原備中に人數五百餘人を添て差遣す。處々の手配殘所なくしたりける。かくて高祖の城の寄手には、小早川左衛門佐隆景、多勢を卒してさし向はる、原田方にもされ具足を着、繩手綱かけたる痩馬に打乘て、上方の勢の向ふをおそしと待かけたり。かゝる處に、隆景の先手福原左近、兒玉隼人並黑田孝高の家人久野四兵衛、衣笠右兵衛等油坂の取出を打破り、高祖の城の大鳥居口より、大勢の兵次第〳〵に、高祖の城下をさして押寄る。原田兵是を見て、いや〳〵あの大軍に向ひて戰をなし難し。先籠城して事の様を見、薩摩方の後詰をも待べしとて、城中に引上る。斯て寄手の大勢城下迄押寄るに、鴇毛の馬に乘たる武者一番に城下に乘付たり。隆景はるかに見て、あれは何者

ぞと問はれければ、黒田勘解由、孝高の家臣久野四兵衛也と答ふ。是は孝高今度九州先手の軍奉行なりしが、軍の目付として隆景に副られし故、城せめに加りけるなり。其後原田は本丸の上より東の方を見やりたれば、博多の津のはづれより、田島原村の前後へ飯盛金武ひなた山三四里の間、旗指物、馬、物具きらめきて、多勢つゞき渡りて見えたり。城中の者共是を見て肝を消し、評議にも不及、早々城をあけわたし可然とて、様々詞をいやしうして、降参をぞ乞にける。是に依て城攻はなくてやみぬ。秀吉公九州を程なく平げ給ひ、賞罰を行はる。肥後國をば佐々陸奥守に賜りしが、原田信種が降参遅かりし故、陸奥守が與力となされ、筑後國黒木兵庫頭家實、先知の内三百町賜りける。陸奥守亡びて後、肥後を加藤清正、小西行長兩人に賜りし時、原田は清正の與力となる。朝鮮征伐せられし時、清正に從うて朝鮮に赴き、彼地において死す。其子を伊豫守嘉種と云。父の家祿

を相續して肥後に居たりしが、或時清正の息女毛利家に嫁する時、嘉種が母故實を能しれる人なりし故、息女に付遣すべしと命ぜらる。嘉種うけごはず。故に清正いかり原田をうとんぜらる。其後原田强梁(きやうりやう)にして清正に屈せず。清正いかりて秀吉公へ訴へられければ、扶持を放すべきよし仰られ、原田が領地を沒收せられければ、嘉種浪人して、肥前唐津城主寺澤志摩守廣高に由緒有し故、唐津に行て寄客となりやしなはれ、二千石を領す。廣高の子兵庫頭興高の時、寛永十四年肥前島原に賊兵起りて、兵庫頭の領地天草に出張せし時、賊兵を誅伐せんがため、嘉種及興高の諸臣天草に馳向ひ戰し時、嘉種戰功の譽有。其後寺澤氏家亡び、嘉種は江戸に行き、保科肥後守正元に仕へ、會津に住して二千石を賜はり、其子孫今に彼家にあり。

○曾根原古戰場

永祿十年の比にや、肥前龍造寺隆信數郡を打靡け、

勢强大になりければ、怡土郡を手に入んと、大田賀江八重犬塚に三千餘人を添て、肥前國無津呂の山越に、當郡御悦と云所に働かせける。原田隆種是を聞、敵を城下に入たてゝはあしかりなんとて、柑子岳の臼杵押へには、國士有田因幡守家人大原、中島、鬼木を置、其身は國士手勢二千餘人を從へて、曾根原に出張し、兩日對陣す。肥前勢旅軍に勞てやありけん、肥前に引退きしと聞ゆ。

○怡土城

雷山の西の方、山上に舊址あり。此城は、人王四十六代孝謙天皇天平勝寶八年に、太宰大貳吉備朝臣眞備をして、此城經營の事を司らしめ、六月甲辰に事始あり。吉備は任はてゝ都に上られしにや、稱德天皇の天平神護元年三月に、又太宰大貳從四位下佐伯宿禰今毛人を、怡土城を築く專知官として、神護景雲二年二月癸卯に城成就せしよし、續日本紀に記せり。然れば此城、十三年を經て、營作の功成れり。續日本紀三十

三卷に、寶龜六年冬十月壬戌。吉備眞備薨云々。勝寶四年。爲二入唐副使一。廻日拜二太宰大貳一。建レ議創二作筑前國怡土城一。寶字七年功夫略畢。とあり。是を以て見れば、怡土城は吉備公の朝に申て、初て築給ひし城也。げにも此人は入唐して學問し、兵術をも傳習せし人なれば、其城の經營、尋常の人のなせるとは懸隔なるべし。（吉備公軍術に精しかりし事、續日本紀天平寶字四年の條下に見えたり。）今も處々に石壁の根石殘れり。或此所偏僻なれば、（或此所、、、より古をしらざる人の評論也。）怡土の聳址（一本によりて整う）には有べからずと云人あれ共、古昔の城は、只嶮を設け、人數をこめて、其所警衛の地と定ぬれば、今の城を築けるごとく、專海濱に近き所にかぎるべからず。是今をしりて古をしらざる人の評論也。筒の瀧とて、雷山の西の山谷より北に向て流るゝ瀧あり。谷水の落口は猶高山の上なり。其所に長く大なる石の樋を一つ埋て、谷水を其内より流し、其流下る水即筒の瀧なり。樋の上には城の門を立しと云。石の樋は殘りて今にあり。樋は一なるが、内にへだて有て、二の

水門より水を通ず、高三尺、長さ七間餘有。門の礎の跡殘れり。今も石の樋より水流て、谷の下に下る事、竹の筒の内より流れ出るがごとし、故に筒の瀧と云也。樋は上下にあり。上筒、下筒と云、是水勢つよく或下筒埋りたる時は、上筒より水を通ずべきためなるべし。此瀧の水は、岩を傳ひて下る事百餘間許、瀧の流れ美景ならずといへ共、かゝる長く高き瀧は、他邦においていまだ見ず。雨中又雨後に水增る時、下より見れば布を長く引けるがごとし。二三里北遠き所よりもよく見ゆ。其水は長野村、本村　神有、加布里をへて海に入、筒の瀧の西近き所に、旗振とて高き峯有。爰に登りて四方をめぐらし見るに、怡土、志摩兩郡目下にあり。北の方ははるかの海を見わたせり。遠く賊船の侵來るをしらんために、此城を築て巽國の襲來るに備へ、旗振嶺には、兵庫を作りて相圖の旗を振、近郷の兵士を招けり。此故に旗振岳と云とかや。又旗振峯の西南に、少なる城址有。其下にから隍あり。是は原田氏の旗下西左近鎮兼、原田隆種に背き、

肥前に與せしを、原田氏是を責んとしけれど、此所に逃來りて籠りし所也。鎮兼は終に原田氏に責亡さる。其事寶珠岳城の條に見えたり。

○篠原古城

篠原村の境内に、つなぎの城とて、波多江上總助鎮種が里城の址有。前原の城につらなりたる故、つなぎと名付しならん。

○うなぎれが辻

飯場村の奥、水無より十町上、うなぎれが辻と云所、筑前肥前の境也。むかし原田了榮と、龍造寺隆信の臣神代と合戰せし所也。

○小倉村古城 是より以下公領にあり

高祖の城主原田彈正少弼隆種入道了榮が端城なりしと云。

○加布里村古城

是も原田了榮端城なり。岩熊河内と云者を城代として籠置たり。海邊にあり。

○寶珠岳古城

長石村にあり。大友家臣西左近鎮兼是に在城す。高祖の城主原田了榮は、元大内家の幕下成しか共、大内家亡びし後は勢に順ふ習にて、大友家に屬しける。然れ共元大内家にしたがひて、今大友の下知を請る事口おしくや思ひけん、毛利元就に心を通じ、忽に謀叛を起し、永祿十年九月十日、原田隆種八百餘人を引率し、長石に發向し、西左近が城を責たりける。鎮兼は此城に楯籠りて、兵を波呂邊に出して防ぎけれ共、波多江、岩熊以下の國士隆種に力を合て、多勢にて押かゝれば、鎮兼の家人、一支へ支て城中に引籠る。隆種城下に押寄て鬨を作り責ければ、城中よりも鬨を合て出合、一足も引退ず。近きをば切ふせ突伏、遠きをば鐵砲にて打拂ふ。隆種の兵共進みかねてぞ見えにける。隆種大音聲をあげて、きたなき者共がふるまひかな。か程の小城に時刻をうつすやうやある。いざ隆種を手本にせよとて、馬を乘放ち歩

行立になり、四尺餘の太刀を眞向にさしかざし、勇猛を勵して切かゝる。原田が家臣石井、上原、鬼木、富田、池園等是を見て、隆種を引留、走り越え〳〵、命を毫毛よりも輕くして、面もふらず進みければ、西左近長石の城を落て、山傳ひに一貴山の嶺に取上り、敵こゝを乘れとぞ招きける。隆種すきまなく責かゝりて、鏃を調へて射ければ、左近叶はじとや思ひけん、爰をも落て、雷山旗振嶺に引籠りけるを、原田が家人并國士岩熊、波多江等が郎從共、山蹈して追さがしけり。西左近は向ふ敵數十人切拂ひ、腹搔切て伏にけり。是迄も家人四十餘人有けるが、或自害し、或落失、殘者十餘人生捕れけり。原田隆種は、直に庄内に陣をうつし、深江、吉井を責んとす。此等は元衆原田に志ある國士なれば、異議に及ばず歸復す。隆種それより取て返し、志摩郡中通りに勤き出、大友方の國士給人を追出し、同郡好士岳の城を責んと議す。此城には、大友の一族臼杵新助鎮賡を城主とし、

て志摩郡の成敗を掌らしめければ、政所と號す、是に依て當郡の内にも、大友に從へる國士由比、泊、小金丸、元岡、古庄、馬場、松隈等詰番して、用心緊しかりければ、輙く責落し難しとて、原田は高祖に引入けり。

○有田村古城

城主は郡士有田内幡守住せりと云傳へたり。

○深江岳城

深江岳は子負原の上の山なり。二重岳と云高山なり。山上に城址あり。又二城岳の城とも云。山上に白山權現の社有。一貴山村の後に當れり。永祿の比より、原田の家臣草野中務大輔鎮永入道宗揚爰に住す。其下に陣の尾と云所在。是は當昔畑三河守と大内德鳳と合戰し、德鳳打負、牟田孫右衛門と云者に討取らる。又其北の方松山の中に首塚有、千人塚と云。千人を埋めし塚といへり。塚の上には地藏堂あり。其邊に淀川村有。むかしは川有しとかや。右大内氏戰の時、

討死の士卒の血、川に流れよどむによりて此名あり。抑〻右にいひし草野氏といへるは、其先祖は筑後國の士にて、御井郡草野郷に住せり。平家の一門九州に逃來りし時、西國の士多くは平家に隨ひけるに、草野太夫永平、始終源氏に心をよせ、無二の忠をいたしければ、頼朝公甚悦び、恩祿を厚く賜るよし、東鑑にも見え侍る。其後裔草野何某は、元弘、建武天下大亂の初より、宮方に心を屬し、忠勤を抽ける。是によりて、曆應元年の秋、芳野の執行法印宗信が、諸國不變の宮方をかぞへけるにも、筑紫には菊池、松浦、鬼の八郎、草野、山鹿、土肥、赤星といへり。是より累代相續して、中務大輔永久が猶子中務大輔鎮永入道家揚が代に至りて、天正年中に、秀吉公の爲に亡されて其家斷絶せり。又二城岳の麓にも端城の跡あり。是本城の取出なるべし。

○吉井岳古城　是より以下唐津領の内にあり

吉井村に在。此郡士吉井左京亮隆光居城也と云傳ふ。

元龜二年正月、肥前國草野四郎種吉と吉井左京亮と、領地の境を論じて、鬪諍に及ばんとする事度々也。此草野四郎は、原田了榮が三男なりしを、草野中務永久養子にして家を繼がしむ。吉井も原田氏旗下なれば、了榮深江豐前守を以て和睦をすゝむれ共、深江が吉井を引にこそとて、草野方不聞入。既に二千餘人の兵、岸岳の城より起出、肥前、筑前の境鹿家嶺を越て、吉井、深江兩人の城下を燒働く間、吉井、深江小勢なれば、小金丸、波多江等に加勢を乞ふ。兩人やむ事を得ずして、由比重留に觸て同道し、同十五日の暮方、吉井濱に張出て事の樣を聞に、今日の迫合に、草野方利なくして、鹿家をさして引退き、吉井、深江は勝軍して、己が居城に歸りける間、小金丸以下明なば引入んとて、其夜は野陣をかけてありける處に、寅の刻ばかりに、草野四郎押寄て鬨を作る。小金丸等の郡士備を押出して見るに、草野が勢四五百人只一所に控へたり。さては今日の迫合に吉井、深江聊

か利有しかば、草野が一陣は引入、其殘黨寄たりと心得、唯一もみにくづさんとす。草野方の手立には、逞兵を勝て六百餘人物蔭に伏置、殘勢許指顯して見せたらば、敵小勢と見侮て進みかゝらん所を、伏兵一度に起て横合に懸て、勝負をせんとの謀也。小金丸、波多江等は是を夢にもしらず。そゞろに深入して戰ふ所に、草野が伏兵青木大村の兵一度に起りて、小金丸、波多江、重留が後より関を作りて責戰ふ。小金丸等案に相違して、引返さんとしけるを、敵前後弓手より槍先を揃て突懸る。馬手は海なれば洩て出べき樣もなし。中々わるびれて、敵に笑るなとて向ふ。敵に引組指違て、重留六郎、波多江上總助鎮種、同次郎四郎、岩熊河内、吉田又五郎、德丸勘左衞門、鬼木次郎八を始として、三十九人枕を並べて戰死す。さる程に深江豐前、吉井左京が館に、鐵砲の音関、手に取樣に聞えければ、各一騎がけに馳來り、命を塵芥に比して戰ふ。草野大村以下二度目の戰ひに打負て、

人數若干討せ、鹿家を打越て、草野郷に引入んとしけるを、追懸て首百許討取、鹿家嶺に切懸て、深江岳の城に引取けり。原田も是を聞、雙方をしづめんとて、高祖より打出けれ共、軍散じたると聞て、其儘加布里の城に滯留し、重留、波多江以下、吉井濱にて討死したる士共の死骸を引取らせ、在所〳〵に送り、草野、吉井を和睦なさしめんとす。同二月十一日、大友宗麟の下知に依て、安東某好子岳の城に來り、臼杵新助と相談して、草野、吉井、深江をすゝめて和睦せしむ。和睦調ひければ、原田も高祖へ歸城し、小金丸民部大輔も小金丸の小山の城に入にけり。

○鹿家古戰場

天正十二年三月十三日、肥前國畑三河守信時、筑前高祖の城主原田下野守信種と、此所にて不慮の合戰す。其起りを尋るに、原田彈正少弼入道了榮病死の後、猶孫下野守信種、肥前松浦の草野中務少輔家久と諸事を談じければ、原田家中の士共の賞罰は、さながら

草野がはからひの樣に成行けり。彼草野と云も、故丁榮が子の持たる家にて、信種が實父の方なれば、原田が家の事に預るまじき事にはあらね共、既に原田家の旗下なり。信種少年といふにも非ず。其上一族家老とも、才力ある老士數多あれば、草野が原田家を進止する事、旁しかるべからずとて、謗り合にけり。かく口々にいはれて後は、信種も、中務の口入は、家中の違亂の基にや成なんとあやぶみ思へ共、さすが色には出さず。山に籠て月日を送りけるが、果して草野と原田が一族家老共、諸事に付て快からぬ事ども有りるを、他國の沙汰には、信種の弓矢の道を得ざるによつて、草野中務後見するを、原田が舊臣嫌ひ、草野を討んと謀るとぞ申ける。畑三河守是を聞傳、兩家を思ひ侮り、草野と原田が所領、上松浦の境に至りて、山川を押領せんとする事兩度也。原田信種を初として、家中の者共憤り思ひける所に、畑三河守方より、三月上巳祝儀の使者として、畑掃部助と云者、高

祖に來る。饗應有て酒數獻に及び、信種が士笠勘介と云者と、軍物語をして口論に及ぶ。勘助が兄笠大炊助と云者、弟を荷擔(かたん)して、掃部助を散々に惡口して恥を與ふ。掃部助もこらへかね、笠兄弟と組んで指違んとひしめくを　深江豐前守、有田因幡守、鬼木清甫等老功の者共、種々なだめて歸しける。掃部助は、三河守が從弟なり。餘の郎從さへあらんに、增て一族の掃部助が事なれば、信時大に怒り、高祖の士一々に撫切にし、掃部助が恥を雪(きよめ)んとて、大村に加勢を乞、三千餘人を率して畑を打立、濱崎迄陣をよせ、勢を二に分け、一千人にて草野を押(をさ)へ、自身は二千餘人の勢をしたがへて、鹿家に陣取て、笠大炊助が所領七山口にある民家を燒拂ひ、男女二百許が首切懸る。原田下野守信種は、三千餘人にて、同十二日の早旦に高祖を出陣し、深江の宿に着ければ、先手の勢は進んで吉井濱に陣を張る。同十三日原田信種深江を立ければ、先手の原田中務少輔、有田因幡守、富田大膳

亮、笠、萩原、小金丸、民部大輔、一千五百餘人、吉井濱を打立、鹿家嶺を打越、畑が先手の備に押懸て、鬨をどつとぞ揚にける。畑が先手畑掃部助　池田、德末有浦等も一千餘人にて、相懸に懸て戰ふたり。いまだ雌雄を決せざる時、原田信種旗本の勢千五百人を率して、山陰より迫て、敵の後より鬨を揚、喚き叫んで懸りけり。すはや後より敵こそ打出たれ。案内者に取籠られては叶ふまじ。濱崎に引て廣みにて戰へと云程こそありけれ。一千餘人の勢、堀、がけともいはず、馳こみ起つ轉びつ逃散けり。畑掃部助は踏留て、きたなし殿原、いづくにか引べき、返せ〳〵と呼りけれども、引返す味方一騎もなく、時實爰にて、人交らせず討死して、先日高祖にての恥を雪がんとて、郎從二十餘人左右に立て競ひ懸り向ふ敵を、あたるを幸に火を散して切廻りける程に、原田が大勢その勢ひに辟易して、敢て近づかず。笠大炊助是を見て、あれ程の小勢に切立られてひるむやうやある。いで

いで掃部が首取て、味方の勇を進めんと、傍若無人に云散し、只一騎かけ出ければ、其弟勘助、石井内膳、富田四郎兵衛、中園左馬助、長監物、西三郎左衛門、波多江丹後守、朱雀小次郎、上原與一兵衛、大田彌次郎、浦志孫右衛門、萩長門守、吉富兵庫助を始として五十七騎、續て掃部助が廿餘人を取籠め討んとす。掃部助が乘たる馬、平首二太刀斬れて犬居にどうと臥ければ、飛下りかち立に成て戰ひけり。郎等共も不殘討死し、其身も痛手數多負ければ、自害せんとする所を、笠大炊助が若黨走り懸り、引組で二刀さし、大炊助に首を取せける。畑は七山に向ひたる勢を呼返し、待調べける間、二の目延引しければ、池田德太以下敗軍の士卒、本陣に崩かゝる。一陣敗て殘黨全からざれば、畑が旗本さはぎ立て、下知をも聞分ず、麾にも廻らず、備を立かねたる所に、原田信種先陣後陣一手に成、三千餘人太鼓を打て競ひ來る。信種は黑絲威の鎧を着、黑き馬に乘て、大身の槍の柄

は一丈許に見えたるをおつ取、眞先に進みければ、三千餘人死を一擧の中に輕んじて、喚て驅たりけり。畑も形の如く備を立なほし、かけ合て戰へ共、先手の勢は、即時に追立られ、右往左往に成て、物の用に不立、旗本の勢も、臆病心付て引色に見えにける。かゝる處に原出が家臣、深江豐前守良治、五百餘人にて深江が岳より打出、船にて海上より責合けり。吉井左京亮は、橘嶺より横合にかゝるを見て畑が勢一度にどつと崩れて北をさして引退く。三河守はいづくへか引べきとて只一騎止て、追て懸る敵を、五騎迄突て落し、大將に組で指違んと、信種が馬印を目に懸て、猶も馳んとしけるを、池田左馬允、大川野玄蕃允、岡九郎兵衛など云、畑が賴み切たる勇士十六人、引返してこはいかなる事にて候やとて、馬の口を取て北の方へ引向け、面々は跡にさがつて追來る敵を防ぎ戰ふたり。三河守は是非討死せんと、馬の鼻を引返し、懸出んとしける所を、池田左馬允手綱に縋りて引

て行を、三河守刀を拔て、むねにて池田が冑の鉢を二打三打うちけれども、冑よければ碎けず。其時大勢走り寄て制しければ、力なく止て濱崎さして引退く。是迄も高祖勢追來りければ、池田左馬允、大川野玄蕃允、岡八郎等十餘人討死す。其隙に三河守は唐津迄引取けり。信種は討取首四百餘、淵の上に梟(かけ)並べ、それより草野押への勢に懸合ける、草野方是に力を得、城戸を開きて打出たり。畑が勢内外の敵に取籠られ、叶はじとや思ひけん、皆散々に落行ければ、信種しばし草野に滯留す。抑、畑、原田旗下の領地諍に付て合戰度々なり。頃年は兩家和睦して境目無事なりしに、今年不慮の合戰出來て、双方の死人七百餘人、手負は數をしらず。是併兩家の衰微の基たるべしと諸人云あへりしが、五箇年を過て、畑、原田果して關白秀吉公のために領地を沒收せられ、子孫永く陪臣となれり。

志摩郡

○鷺　城　址

今津の東小山の上にあり。いにしへ鷺氏の人の居城なり。其名しれず。山上に城主の墓あり。

○臼杵氏端城

今津の西にあり。大友の臣臼杵重察が里城なりと云。其所に重察が墓あり。

○柑子嶽古城

草場村の東に在。永祿年中大友宗麟より、當郡小金丸の親山と柑子岳に城を築、城代を置て志摩郡にある身方の助とす。親山の城には大友家臣日野三九郎と云者を入置、此城には宗麟の一族臼杵新助鎮賡と云者を置く。後に日野は去て臼杵一人にて志摩郡を掌れり。弘治の初、高祖城主原田彈正少弼興種、羈旅の陣中にて頓死し、家族離散に及ぶ。其時興種が嫡子隆種、とかくして家をたもつ。其比毛利元就を頼み大友に敵す。是によりて宗麟臼杵新助に下知して、隆種を亡さんと企らる。新助は奥志摩の士、泊中務少

輔、同又太郎、由比の重留六郎以下を相語らひ、樣樣謀をめぐらし、立花高橋等に加勢を乞、原田を責亡さんとす。隆種もいかにもして臼杵を亡さんと思ふ折柄なれば、たがひに合戰止事なし。ある時隆種柑子岳の城を攻けるに、城中兵粮盡なんとする由立花道雪聞て、謀を廻し、柑子岳に兵糧を籠むべしとて詮議有。高祖の城に人數を遣し責る程ならば、柑子岳の寄手も根城を責とらるゝ事もや有と、高祖へ人數を引取べし。其間に兵粮を柑子岳に籠むべしとて。道雪より軍勢千五百人生松原迄出さる。然れ共柑子岳の寄手は引取らず。別に高祖より騎馬百人許打出て、立花勢に夜討をかけ、入亂て合戰せしが、終に高祖勢打勝て道雪の人數は立花さして引取けり。其後柑子岳を責けれ共、城中よりも能防ぎて落ざりければ、此城一を攻落さんため多くの人數を殺し、隙を費さんも詮なしとて、先人數をぞ引上ける。是より先、永祿十一年の春、立花の城代、立花但馬守鑑載謀

叛の事あり。大友家の諸勢是を責む。時に臼杵新助も鑑載を責んとて出陣したりける留守をうかゝひ、原田勢柑子岳に押寄て乘取ぬ。新助此由を聞、大に憤りて柑子岳に押寄て、即時に原田勢を追出し、城を取返しける。かくて新助は元龜三年の冬、政所職を辭して豐後に歸る。其代として臼杵進士兵衞鎭氏來りて城を守る。此人驕慢にして慾深く、恥辱をかへり見ず、處分に私曲多かりしかば、當郡の城主給人等多くはうとみて、其下知を輕んず。進士兵衞常に原田隆種を亡さんと謀りけるが、却て原田がために責亡されける。（此事委く怡土郡の部に記す。）かゝりける後は、志摩郡の城主小金丸民部大輔等も皆原田に屬せり。今此城址東の方、本丸の址長さ六十間、横八九間あり。俗是を城（じやう）の上と云。二の丸長さ四十間、横二十間許有。下城の上と云。此邊に水あるべき所は見えず、南の方三町許に陣の尾山と云所有。是原田氏此城を攻し時の陣所なりと云。

○加也山古城

小金丸の枝村親山と云村の上にあり。故に俗には親山といへ共、實は加也の山也。麓より嶺迄十三町許あり。其嶺の廣さ縱六町、横一町餘有。いにしへ山上に城あり。近代亂世の時、郡士小金丸民部少輔良種是を守しと云傳ふ。又此山の北の麓にも城址有。是は小金丸民部大輔政種守りしと云。又大友氏より志摩郡の目代として、日野三九郎と云者をもしばらく此城に置れしと云。

○姫島古城

當島の姫大明神社の上の山を城山と云。是城址なりといへり。いにしへ海邊には、海賊共多く來りをかせしにより、城がまへをして、海賊を防ぎたるなるべし。

○土師村古戰場

臼杵進士兵衛鎮氏は大友氏の家臣にして、志摩郡の政所職を勤め、柑子岳に在城せしが高祖の城主、原

田彈正少弼隆種入道、了榮を亡さんと謀る。然るに元龜三年正月十六日、了榮宿願の事有て、今津の毘沙門に參詣しけるを、討んとしけれ共叶はず。同月二十八日、柑子岳を打出、原田が所領を打通りける。原田方より此由を聞、大勢にて打出、池田河原にて散々に戰ひけるが、進士兵衞打負て泊の城に馳入らんと、土師の平等寺迄落行しを、高祖勢寺中に亂入て責ければ、進士兵衞を始として郎徒二十八人、同時に腹を切てけり。進士兵衞が首は、西彌八郎と云者打取ける。志摩の郡士共、或討れ、或落行ければ、軍は爰にてやみにけり。かくて進士兵衞が墓を平等寺に築て、其しるしに、山茶を植て臼杵塚と名付しとかや。

○馬場村古城

志摩城と號す。是大友氏の家臣古庄能登が居たりし城也。後に馬場越前と云し者も在城せしとかや。

○泊村古城

村より巽に當りて城址有。是泊中務少輔鎮家が城址

なり。其前は泊美作〳〵云し者在城せり。此美作は源姓にて、新羅三郎の末流とぞ聞えし。然るに美作、永祿八年の比病て家に死せり。末期に及で其所領を三に分て、十六町を嫡子駿河に與へ、十町をば二男兵庫助に讓る。又後妻に幼少の男子一人ありけるが、母の寵によりて十五町の地をゆづりけり。其外新田をば其妻にあたへぬ。美作死して後、兵庫助つく〳〵思ひけるは、嫡子にさし次で、我こそ領地を多く得べきに、何ぞ繼母の寵によりて、末子に超らるゝ事こそ無念なれ。所詮弟を殺害し、彼が所領を駿河と二人して分ち領せんと惡念を起し、或時兄が許へ行て、しか〳〵と語りける。駿河守も不義なる者成しかば、尤可然と同意す。兵庫助則繼母の許に行て幼弟を切害し、繼母を追出しけり。其後駿河守が方より、末子の所領半分宛領せんと云遣しけれ共、兵庫助返事にも及ばず、二度目の使を切殺す。駿河守いかつて家人を引率し、兵庫助が館に押寄たり。兵庫助も家人と

共に打て出、さんざに責戰ふ。終日戰ひ暮し夜に入ければ、駿河守泊をさして引退く。其後兵庫助は近邊の溢者共を語らひ、桂木寺と云所に城をかまへ、兵粮を籠置、二百餘人の勢にて泊の城に押寄、火を放て責たりける。駿河家人をいさめて、相共に命を捨て防ぎ戰ふといへ共、終に追落されて、馬場村に引退き、近邊の郡士に加勢を乞て泊に寄んとす。兵庫助は兄駿河を追落し、泊に城をかまへ、猶惡黨を招よせ、近邊を押領せんとす。其比志摩郡柑子岳の城には、臼杵新助在番して、志摩郡の政所職を掌りければ、此由を聞、駿河が伯父由比紀伊守政長、並小金丸九郎秀種、波多江上總助鎮種等三人を指遣し、双方を宥め、戰を止め、駿河をば元岡右衞門大夫に預て元岡の館に押籠、兵庫助をば馬場越前に預て四人のごとくにてぞ置たりける。其後飛脚を以て豐後に注進し、下知を待ける。宗麟此由を聞、大にいかり、泊兄弟を豐後に召寄、一萬田彈正に云付、駿河を追放し、

兵庫をば誅せられぬ。駿河兵庫助が所領二十六町をば、出比紀伊守に預られ、繼母と其子が所領十九町に新田を加へて、肥前國住人松浦黨の浪人岡口出雲に賜り、泊出雲と名乗ける。されば共出雲は年老たれば、長男中務少輔鎮家こそ、大友氏には出しけれ。又村より西に當りて、大日堂の上にも城址有。是は泊内膳と云し者の城なりしと村民はいへり。是美作が末子の名なるにや。

○元岡村古壘

是は郡士元岡右衞門大夫と云し者の居所なりしと云。そのかみ切寄など云し跡あり。城址とは見えず。

筑前國續風土記卷之二十八　終